

陸自駐屯地紹介シリーズ 第36回

軍都広島の新 海田市駐屯地

第13旅団司令部、第46・47普通科連隊他

駐屯地シリーズ編纂委員会

広島……焦土からの再生

広島県には重い陸軍の歴史がある。精兵の名の高い第5師団をはじめとして幾つかの師団、日清戦争の間明治天皇も幡を進められた大本営跡、広島陸軍幼年学校、将兵が歓呼の声の中に出征した宇品港の歴史などがそれである。

その中でも第5師団が明治年間以来歩んだ道は、維新の態勢を確立して、次いでアジアの片隅の小国から世界の大国に発展する過程の先頭に立って突き進んできた道である。辿ってみよう。

明治2年版籍奉還、4年廃藩置県、6年徴兵令制度と新生日本への改革は進んだが、一方征韓論の議決裂の後西郷他5参議下野等に見られる改革を心よしとせぬ動きは、先ず明治7年佐賀の乱となって火を吹いた。この乱に対し当初熊本鎮台が対処したが兵力弾薬不足から東京、大阪、広島各鎮台の兵を急派し鎮圧に当たさせた。佐賀の乱が平定されて間もなく、明治9年に前

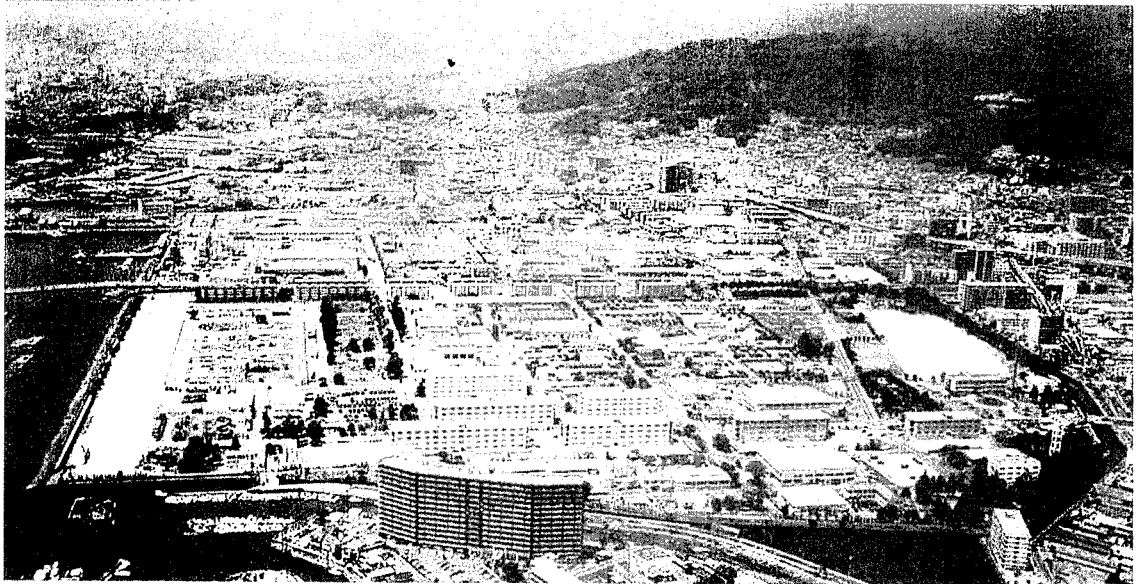
原一誠を盟主とする萩の乱が勃発した。明治8年広島に創設されていた歩兵第11聯隊は明治9年の萩の乱鎮定に活躍した。翌10年旧士族の新体制に対する不満がついに爆発し、西南戦争が起きた。この鎮定作戦において第11聯隊は各旅団に勢力を分散して配置されて運用され期待に応えて随所に善戦し、西郷軍は鎮定された。その後政府と陸海軍の最大の関心事は外国からの国難に如何に対処すべきか、国の守りを如何に全うするかの問題に移行したのである。その最初の国難日清戦争に於ける大島義昌少将指揮する広島兵団第9旅団の活躍は目覚ましいものがあった。

まず天津条約に規定された居留民保護の行動として大島義昌少将指揮下の第9旅団11聯隊1大隊が仁川上陸したのが明治27年6月12日、7月25日清軍の発砲を受けて開戦となるや、第9旅団主力は緒戦の成歎・牙山の闘いに勝利し、その後我に数倍する清軍に対し

て神速を以て攻撃し、翌年3月には鴨緑江を超えて清国領に進撃し、最終的な勝利に貢献したことは多くの方々のご承知のところである。欧米列国が予想だにできなかった大國清に対する小國日本の勝利と云う戦果をもたらした、その中で多くの武勲を立てた広島兵団が原駐屯地に凱旋したのは明治28年4～6月の頃であった。

続く明治33年には北清事変が起り、各外国公館と居留民が危機に陥った。この救援に示した我が陸軍の精鋭ぶり、軍規の厳正さには現在の歴史教科書が触れていない我が日本の武勇と高い徳義の発露があった。即ち英軍セーモア中将指揮下の列国軍は、議して決せず、決して動かず、動いても日本の平定地域に入らぬ略奪を恣にした有様に対して、配置

した我が陸軍の精鋭ぶり、軍規の厳正さには現在の歴史教科書が触れていない我が日本の武勇と高い徳義の発露があった。即ち英軍セーモア中将指揮下の列国軍は、議して決せず、決して動かず、動いても日本の平定地域に入らぬ略奪を恣にした有様に対して、配置



されれば先頭、戦えば勝利、占領すれば告示を以て破廉恥行為を深く戒め、強盗行為を犯した兵を懲役6年に処する一例があるなど実に厳しい軍律を維持したのである。イラク復興支援群の活動が平成の武士道発揮とすれば、北清事変に於ける我が日本の規律は明治の代に於ける武士道発揮であつたといえよう。この事変後に於いてもロシアは露骨に中国大陸への野心を暴露していたが遂に日露戦争開戦となつた。暫時内地に雌伏していた広島兵団は明治37年5月に遼東半島に上陸し、第2軍の隷下に入り、事後得利寺の闘いを皮切りに遼陽城攻撃、奉天会戦まで闘い、明治38年12月から39年2月にかけて復員した。その後も第5師団は武勇の誉れを保ち、大東亜戦争劈頭、マレー攻略戦で快進撃を続けシンガポール攻略に至るのである。

だがこれら誇りの歴史資料は昭和20年8月6日の原子爆弾により一挙に焼散した。その劫火の燃えさかる広島市内に敢然として飛び込んでいった部隊の事を知る人は少ないようだ。当時宇品にあった陸軍船舶司令部隊下の砲部隊である。船舶司令官佐伯中将は直ちに市民に布告を發して復旧を呼びかけると共に隷下部隊を広島市中心部に出勤させた。宇品から広島中心への鉄道、道路は壊滅していたため水上交通

路が使用された。そして「医療救護」「警備」「食糧補給」「交通」「通信」「給水」等の活動をした。この救援活動に従事した船舶特別幹部候補生の体験記録が靖國偕行文庫にある。広島県教育委員会の資料に依れば爆発時の中心温度約6千度と記されている。生きながらこの一撃を受けた人体の損傷状態は想像を絶し、救助時の模様は転載に耐えられないほど悲惨である。救助部隊の若い将兵がよくパニックを起こさなかつたものと思わざるを得ない。

一つのエピソード
朝鮮公族李錫公殿下45期は第2総軍参謀として司令部に勤務され、宿舎から馬で出勤中被害に遭われた。必死の搜索で発見されたが治療の甲斐無く、ご遺体は9日に故郷朝鮮の妃殿下の元に旅立った。

健康上の理由で当日お供が出来なかつた御付武官吉成弘中佐37期は、大混乱の中、後始末を肅々と果たした後、お見送りの場をみせず多くの人の不審を呼んだ。そこへピストルの発射音、こめかみを打ち抜いた吉成中佐の姿が有り、一枚の遺書が残されていた。「御付武官として6日朝殿下に随行出来なかつたことは誠に申し訳ない。今は後始末も全て終わったのでこれで思い残すことはない。このうゑは殿下のお供をして死出の旅に参ります」(広島師団史340頁)。

心の奥に深く激しく感じるエピソードである。

戦後原子爆弾への嫌悪感に国防への冷たい感情を呼び、現在もお原爆投下の日には、一般市民に対する無差別爆撃をした連合国を非難することよりも先ず「過ちは繰り返しません」と、まるで原爆投下がわが国に責任があるかの様な「反省」が声高に叫ばれつづけている。これは過ぐる一時期ソ連の原水爆実験連続に関して「平和勢力の実験は良い」等と妄言をまき散らした勢力と同じ勢力にリードされていた調の流れが今も跡引いているのではな

いのか、筆者が懸念するところである。
海田市駐屯地の歴史と部隊
海田市駐屯地は、広島市の東隣、安芸郡海田町にある。(かいた市でもかいだ市でもない。海田町である)

駐屯地は昭和11年に軍需品集積所の建設が開始され、加えて海岸地域が埋め立てられ現在の44万5千平方メートルの地積が確保された。戦後英豪軍が駐留し、昭和25年警察予備隊の発足に伴い駐屯地が創設された。
現在は陸上自衛隊第13旅団司令部をはじめとして次の部隊が駐屯している。旅団は旧陸上自衛隊第13師団が平成11年3月29日改編されたものである、この改編に伴い隷下部隊もそれぞれ改編があつた。

第13旅団司令部部隊
旅団司令部を支援する部隊である。

第46普通科連隊

昭和45年3月普通科で編成完結し同月海田市駐屯地で創隊式・祝賀式を実施した。広島県全県を警備隊区とし、災害派遣に活躍している。第1次カンボジア派遣施設大隊には3名、第3次東チモール派遣施設大隊では5名、第23次ゴラン高原輸送派遣隊では3名が参加した。

第47普通科連隊

平成11年3月23日編成されたコア連隊(即応予備員師団で編成される連隊)であり、本部管理中隊は海田市駐屯地及び日本原駐屯地で、第1中隊は普通寺駐屯地で、第2中隊は山口駐屯地及び松山駐屯地で、第3中隊は出雲駐屯地、米子駐屯地、海田市駐屯地でそれぞれ招集訓練を担当実施している。

第13後方支援隊

師団時代は第13後方支援連隊と名乗っていた。その任務の特性から、第1次カンボジア派遣施設大隊には29名、第5次ゴラン高原輸送隊には5名、第3次東チモール派遣施設大隊には10名、第5、第6イラク復興支援群には19名、第23次ゴラン高原輸送派遣隊には13名が参加した。旅団の整備補給等技术を要する支援を行う部隊であり、何時の日か風雪穏やかならない事態と

なつて第47普通科連隊他の編成定員が満たされた時、後方支援連隊の勢力も増加されなければなるまい。だがこの勢力増加は技術部隊であるだけに特技者養成の時間を必要としよう。

第13施設中隊

旅団の施設戦闘を行う部隊である。この部隊も師団であった時代は大隊であった。第1次カンボジア派遣施設大隊に3名、第5次ゴラン高原輸送隊に1名、第3次チモール派遣施設大隊には1名、第23次ゴラン高原派遣輸送隊には6名が参加した。

第13通信中隊

旅団の野外通信支援を行う部隊である。第1次カンボジア派遣施設大隊に1名、第23次ゴラン高原輸送隊に1名が参加した。

第13音楽隊

この種部隊は過去音楽活動を通して数え切れない程の場所と時において地域の住民に癒しを提供し続けた部隊である。その奏でられる軍歌、自衛隊隊歌、その他の音楽は高度の音楽性があるばかりでなく、懐かしさがある。今秋に松江市で開催される61期生全国総会に遠路支援を頂く由である。

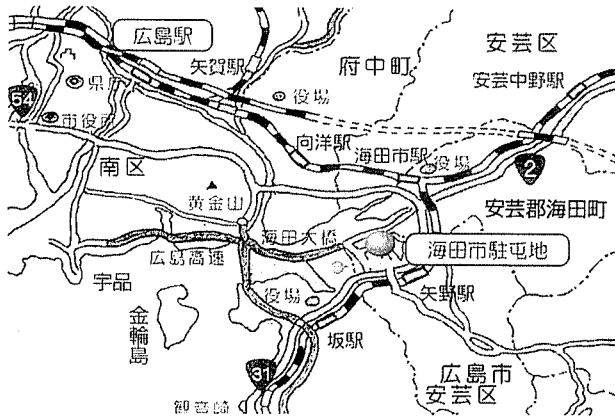
その他中部方面隊隷下部隊の海田市駐屯地業務隊、第312基地通信中隊、第350会計隊、第10輸送業務隊第2端末地業務班、大臣直轄部隊の第116地区警務

隊が駐屯している。

海田市駐屯地へのアクセス

今回航空機の経路を利用した。アクセスは羽田空港から広島空港まで約1時間、広島航空から山陽本線白市駅へ出て、白市駅から海田市駅までJRで出て所要時間2時間半で済む。到着後地上滑走の間に、連絡バスは出発した後であった。

次のバスに乗った。席は最前列の視界良好な席に座った。空港敷地内の道路は、出来たての高速道路のようである。そこを出ると道路は徐々に古びた



状態となつて丘陵地帯の合間を縫い、暫く走るとやがて狭い平地に入り、短い距離を線路に沿って走り、やがて山陽本線白市駅についた。駅前広場はバスの方向変換さえ不可能な地積しかなく駅舎も小さかった。

約30分待つて列車に乗り込んだ。景色を見ている内に目についた事があった。赤みがかつた艶のある瓦で葺いた入母屋造りの家が多いのである。一層目の入母屋の方向に直行する形で入母屋の二層目が重ねられており、まるで城の隅櫓の様な形の家を随所に見た。関東地方では余り見られない建築様式であった。

海田市駅には駐屯地広報班から車が迎えに出て頂いており、挨拶を交わすとすぐに駐屯地に向かった。意外に多い交通量である。道の両脇には外食産業の看板も多い。約5分程走つて駐屯地営門についた。

営門風景

駐屯地外柵沿いには、幅約8m深さ3mはあるかと思われる堀川が流れていた。両岸は堅固な石造りであるが水は少ない。その堀に懸かる橋を渡ると営門である。右手奥には屋上に国旗が掲揚されている3階建ての建物が見える。第13旅団司令部庁舎である。その手前のロータリーの右手前には石碑が偉容を誇っていた。右に眼を転じると

正面には体育館がある。青い屋根の高さのある2階建ての建物で、1階は売店、厚生科などが入り、2階は体育館が入っているという。体育館には高い天井が必要であるが、そのためか、屋根は高い。警衛所は営門すぐ左手にあり、工事を示す鉄パイプで組み立てられた囲いの中にあつた。体育館の奥には道路の両側に隊舎が並び、更に進むと海に出るとのこと、建物の影になつてその海は見えなかつた。

部隊の食事

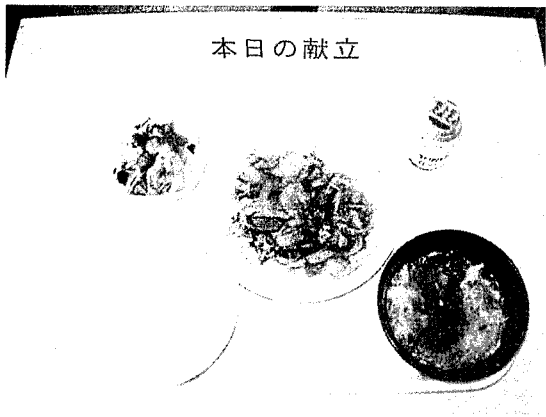
到着時既に昼食時間も終わりに近く、そのまま車で駐屯地食堂に向かつて案内された。「喫食は希望されますか？」お誘いをこれ幸いとして拝辞することなく「お願いします。」と返事した。理由がある。陸軍の先輩方に現在の部隊の食事はどの様な考えが込められているのかを紹介したいと思つたのである。

まず陸上自衛隊の食事支給について、基本的に営内居住者には食事が支給され、営外居住者は有料喫食が原則である。勿論出勤時、野外演習時は全て無料である。 ついで給食業務の占める位置について、各駐屯地には必ず「給食委員会」なる組織がある。その最高責任者は駐屯地司令或いは駐屯地業務隊長で、業務隊長、糧食班長、栄養士、炊事担当

のリーダー等業務関係者のほか、食べる側の各階級の隊員も参加している。ここでは入隊間もない若い隊員の意見も無視される事はない。むしろ現代若者の嗜好傾向として尊重される趣きさえある。献立希望の他、勤務員のサーブスぶり等広い分野に意見が交わされ、業務に反映されている。給食は派手ではないが、静かに重視されている分野なのである。

喫食の現場について

案内されたのは幹部食堂で、旅団司令部所在の駐屯地幹部食堂としては意外に規模が小さい。食堂の入り口のコート懸け・帽子置き場、手洗いに続いて摂食に関する啓蒙記事の掲示、そ



本日の献立

して台の上に配食見本が並んでいる。食堂ではセルフサービスであるが配食窓口から受け取った皿をトレイ（お盆）の上に並べる見本が展示されている。

膳の上の皿の並べ方には、工夫次第で上品にもなれば野卓にもなる。また部隊の食材には嘘や誤魔化しがない。その材料を勤務員が誠意を込めて調理する。それも少量ずつではなく一度に大量の調理をするのである。であるならば良い材料、手抜きのない美味しい献立を、上品な皿並びにして、手を合

わせて感謝しながらの食事が自衛隊の食事であって欲しいもの、配食見本の意義も充分に感じ取ることが出来た。この日昼食の献立はちらし寿司、具だくさんの汁椀、煮物小鉢、甘みの小鉢であった。冷め始めていたが充分においしく頂けた。

食事が終わりがけた頃、調理場や食堂の中を見回っている幹部がいた。糧食班長とのこと。立ってお礼を述べた。短い話の中から給食業務に関して、心を込めている事が伺えた。

銃剣道競技会

この日、午前中から旅団の銃剣道競技会が開催されていた。絶好の取材機会である。

筆者が競技場の体育館に入ったのは午後の課業開始直後であった。既に正面壇上には旅団長佐藤修一陸将補以下



幹部が並び個人戦の準決勝が2個試合場で開始されていた。この競技会団体戦では部隊の規模によりA、B、Cグループの3つに別れて争われ、第8普通科連隊（米子）、第13施設中隊（海田市）、第13飛行隊（防府）が優勝していた。個人戦では陸士1任期未満、

1任期以上、女性自衛官、陸曹、幹部の区分で争われるとのこと。既に準決勝まで進んでいた。筆者もすぐ引き込まれていったが、約15年ぶりで見ると試合には目がついて行けなかった。動体視力が落ちていたのである。「相突き」とみれば判定は「勝負あり」「勝負あり」とみれば「浅い」。だが、決勝戦に入る前には慣れを取り戻し、勝負

判定に一致することが増えてきた。

中で、注目する対戦があった。女性自衛官個人戦の決勝である。赤、白選手の身長に大きな差があった。体力にも大きな差がある事が予想されたがその予測は見事に外された。「延長」「延長」「延長」漸く勝負がつくまでに約20分近い激闘が繰り返され、女性特有の高い声での気合が続いた。こうなれば勝負の結果は問題ではない。勝者も敗者も納得が行く形での終焉が欲しかった。結果はほんの僅かな隙に乗じた第13通信中隊の中垣士長が勝ちを制したが敗れた第13飛行隊宮崎1士にも応援団が駆け寄り拍手を贈っていた。実際勝負は僅少差であった。双方共に刺突部に当たること数知れず、もしどちらかが当たった瞬間に抜きの動作を加えて半歩下がり残心を示せば「勝負あり」の判定が下ったであろう場面が幾度かあった。

競技終了後の旅団長訓辞は「痛烈」であった。「待ち剣があった。これはコーチ、部隊長の責任である」。氣勢を込めた、やや高めの中口で述べられた言葉に肺腑を抉られた当事者が居たに違いない。少ない数の旅団隊員を戦える精鋭に育てる任務のために、試合の結果よりも戦う姿勢と気迫を育成するのが旅団長の責務と考えられたであろう。待ち剣を忌む姿勢は正に贅

同出来るのである。

表彰式が終わって優勝チームの隊長にショートインタビューを実施した。まずはAグループ優勝の第8普通科連隊長出水田1佐、「優勝おめでとうございませす。優勝について一言お願いします」「若い隊員達の精進のお陰です、今度こそとの願いで本当に良く頑張ってくれました。これからですか？すぐ米子に帰隊致します。駐屯地では隊員が待つておりますので」「帰り道くれぐれもご安全を」「有り難うございませす」そして写真撮影への参加を促す選手・応援団の呼ぶ声に走り去り列の真ん中に納まった。笑顔が素晴らしかった。次いでCグループ優勝の第13師団飛行隊長古賀2佐にインタビューした。そして話題は女性自衛官津優勝の宮崎1士に話が移行した。「去年の3月入隊の隊員です。新隊員前期課程3ヶ月、その後新隊員後期の航空機整備課程3ヶ月を終えたばかりの隊員で特技錬成の合間を縫って銃剣道をやらせました。経験も少ないので、ただ、先に出せ、初一本だけ狙え、と教えました。再々延長まで戦い続けられたのも、それに徹したからだと思ひます」団体の優勝もあり満面の笑みに満ちていたが、ふと表情を引き締めると「次は追われる立場に立たされます。明日から精進です」同じように走って写真

撮影の列の中央に納まった。Bグループの第13施設中隊は、海田市駐屯部隊でもあり、体育館内でひとしきり氣勢を上げると早々に引き上げていった。隊舎の前で優勝報告会をするとの事で後を追った。隊舎前の朝礼場に隊長前原3佐以下が整列して居るところへ選手が入場して来た。隊長はじめ皆日頃は謹厳なのだろうが、今日は笑み崩れている。報告会が終了する際に、サイダー、炭酸水のシャワーが浴びせられた。体にかかったシャワーを指でぬぐってなめる者があり、どこかやんちゃ坊主集団の趣があった。終わって中隊長にインタビューした。「選手に任せ切りました。我々は明日からは更に厳しく精進しなければなりません。あれが優勝部隊のザマかと云われなためです。だが強制されるではありません。誇りをもつて自らの精進です」聞けば試合開始前に祝賀会の予定も整っていたという。それが無駄でなかった。さぞかし旨い酒を味わう事であろうと思つた。

顕彰館

試合終了後の興奮が漂う中を、顕彰館に向かった。ここには陸軍時代の歴史を伝える展小品があるという。まず自衛隊が作成した広島幼年学校跡地、大本営跡、歩兵第11聯隊、第5師団司令部指揮連通信室跡、野砲兵第5聯隊跡、

第13旅団の編成・任務

第13旅団司令部	指揮・幕僚活動
第13旅団司令部付隊	旅団司令部の支援業務
第8普通科連隊	近接戦闘による敵の撃破あるいは地域の占領確保
第17普通科連隊	
第46普通科連隊	
第47普通科連隊(コア部隊)	平素は即応予備自衛官等の教育・訓練を実施
第13特科隊	火砲による火力戦闘
第13後方支援隊	補給、整備、輸送、衛生等の兵站支援
第13高射特科中隊	対空ミサイルによる対空戦闘
第13戦車中隊	戦車による敵の撃破
第13対戦車中隊	対戦車ミサイルによる敵戦車の撃破
第13施設中隊	各種施設器材による施設作業
第13通信中隊	各種通信器材による通信の確保
第13偵察隊	偵察警戒車、オートバイ等による偵察警戒
第13飛行隊	ヘリコプターによる輸送、指揮、連絡支援
第13音楽隊	音楽演奏による隊員の士気の高揚

広島陸軍病院跡などが描かれた「旧第5師団散歩マップ」があった。

また精鋭を誇った歩兵第11聯隊の軍旗の終焉に係わる証言の書があった。歩兵第11聯隊軍旗が昭和20年8月26日20時30分、シンガポール昭南神社で奉焼されたと云う当時の聯隊旗手・中宇根諭氏の手記を、これもまた当時の聯隊本部書記の陸軍伍長島中盛義氏の毛筆浄書が展示されていた。傍に飾られた軍旗の写真と共に厳しくキリリと締まった空気が漂っていた。

広島陸軍幼年学校に係わる展示物があった。目を引いたのは学校本部に掲げられていた菊の御紋章である。幼年学校の疎開の際取り外され、敗戦と共に毛利一族墓所近くに埋蔵隠匿され、昭和47年宅地造成時発見された物である。緑青に覆われているが、在りし日々には燦然たる光沢で人々の目を引いていたに違いない。

地味な写真があった。原爆投下直前に広島幼年学校を撮した航空写真である。これは米軍が原爆投下直前の偵察飛行で撮したもので長らく米国公文書館に秘蔵されていたものを広島大学名誉教授・広島陸軍幼年学校48期高橋禎夫氏が探し出したものである。その写真撮影事情の無念さ、映像への懐かしさの交錯に縁ある人々の胸中は察するに余りある。

雅の空間

広報室に戻り、お茶を頂いていると窓の外の庭園で植木の選定が続いている人影があった。外へ出て尋ねると、食堂で皿洗いや作業のリーダーを務める永井氏の努力奉仕であるという。そしてこの庭は創立記念行事には野点の茶席がしつらえられ人々が列を成すという。庭に出てお話しを伺った。少しもお役に立てればという心で奉仕して頂いているとのこと、この庭は名庭に見られる大金をかけた跡はない。しかし心を込めた跡は明白であった。茶席の場を想い浮かべると、制服の自衛官がぎこち無い所作でお茶とお菓子を頂く様子や、市民特に幼い子が手のひらに余る椀で頂くお薄の様子が目に浮かぶのである。心ほのぼのとするではないか。

国旗降下の時間がきた。事前に降下手とラッパ手の名前が放送された。ラッパ手は錬成訓練中という事であったが、音程も正確で見事な響きのものであった。そして駐屯地を辞する時間が来た。競技会当日の多忙な日に全時間取材に協力して頂いた駐屯地広報班長加藤進2尉に感謝したい。また、資料探しは靖國偕行文庫室長白石博司氏(陸自66B)の手を煩わし、陸軍時代の記述内容は、広島師団史等を参考にさせて頂いた。感謝したい。

旧第5師団散歩マップ

① 広島陸軍幼年学校門柱

② 広島大本営跡

③ 歩兵第十一聯隊門柱

④ 第五師団司令部指揮通信室

⑤ 広島大本営正門

⑥ 野砲兵第五聯隊跡

⑦ 広島陸軍病院門柱

⑧ 部隊跡記念樹

写真撮影 14.9.4